
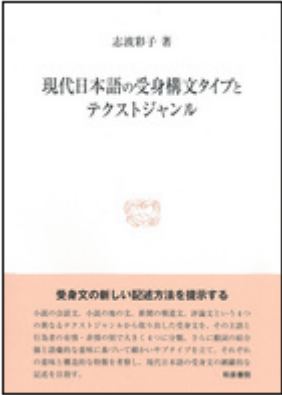


研究者総覧：志波 彩子 (SHIBA, Ayako)

氏名	志波 彩子 (SHIBA, Ayako)	
職名	准教授	
所属講座	日本語文化専攻応用言語学講座	
学位（専攻分野）	博士（学術）・東京外国語大学	
メールアドレス	shiba@lang.nagoya-u.ac.jp	
研究分野	日本語の動詞構文論	
	日本語受身文の通時的・対照言語学的研究	
	コーパスを用いた日本語とスペイン語の記述研究	
現在の研究テーマ	<ul style="list-style-type: none"> ・非情の受身の歴史的発展について ・間接疑問文の記述的研究 	
所属学会	日本語学会	
	日本語文法学会	
	日本語学会	
主要著書・論文	『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』, 和泉書院, 2015年, 431頁.	
	「「ト見ラレル」の推定性をめぐって—ラシイ, ヨウダ, (シ) ソウダ, ダロウとの比較も含め—」, 『日本語文法』, 13巻2号, 2013年, 122-138頁.	
	“Changes in the Meaning and Construction of Polysemous Words: The case of <i>mieru</i> and <i>mirareru</i> .” <i>Corpus Analysis and Diachronic Linguistics</i> (John Benjamins, 2011): 243-246.	
	「認識動詞の非情主語受身文—「見られる」「思われる」「言われる」「呼ばれる」を中心に—」, 『日本研究教育年報』, 13, 2009年, 1-24頁.	
	「2つの受身—被動者主役化と脱他動化—」, 『日本語文法』, 5巻2号, 2005年, 196-212頁.	
自己紹介文	<p>高校時代メキシコに留学し、スペイン語を習得する過程で、逆に日本語の美しさを感じ、日本語教師を志して大学に入りました。しかし、卒業論文の執筆を通して、言語現象の中に潜む一般法則を見つけることの楽しさに目覚め、2年間のブラジルにおける日本語教育の後に大学院に入り、本格的に研究を始めました。博士論文執筆中に長女が生まれ、提出後に次女が、そして、講師や研究員として勤務する中で三女が生まれ、現在3人娘の育児と格闘しながら研究を続けています。</p>	

	<p>最近は、主にコーパスを用いて抽出した用例を、その意味・構造的なパターン（構文）によってタイプ分けし、記述するという研究を中心に行っています。コーパスの活用は日本語教育の現場でも非常に有用と考えています。また、研究対象は主に現代語の共時態ですが、現代語は歴史的な流れの中の一つの局面であり、歴史的な体系の発展に矛盾するものであってはならないという思いから、近代語、近世語にも目を向けるようになりました。同時にスペイン語との対照研究も進めています。このように、通時的、また対照言語学的にあらゆる角度から現代日本語を見つめ、考えて行きたいと思っています。</p>	 <p>志茂彰子 著 現代日本語の受身構文タイプと テキストジャンル</p> <p>受身文の新しい記述方法を提示する</p> <p>小説の会話文、小説の地の文、新聞の報道文、学術文ライティングの論文やアカデミック論文から取り出した受身文を、その文脈と話し手の心理・感情の状況とをともに分析、その文脈の場を詳しく説明的な書体に基づいて読みやすいスタイルを定めて、それらの意味と構造の両面を整理し、現代日本語の受身文の体系的な記述を提示する。</p> <p>和洋書房</p>	<p>受身構文の体系的・網羅的記述を目指しながら、それぞれの受身構文とテキストジャンルとの関係についても考察しています。</p>
<p>受験生へのメッセージ</p>	<p>エレガントでスマートな理論よりも誠実で地道な実証的記述研究を行っています。方法論として、コーパスを用いて用例を収集しますが、出てきた数だけを見て何かを判断するのではなく、1例1例の用例に忍耐強く目を通し、現象の中に潜む一般的な法則を発見する楽しさを伝えたいと思っています。そして、文法がそのような意味・構造的な体系になっているのはなぜか、ということ問い、考える力を養ってほしいと思います。そのためには、先行する研究と誠実に向き合い、そこから謙虚に学ぶ姿勢も必要です。「学んで思わざれば則ち罔し、思いて学ばざれば則ち殆し」という言葉を私自身も常に自分に言い聞かせています。</p>		